

タイトル：2025 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 26 回）

日時：2025 年 12 月 19 日（金）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「1547 年条約におけるオスマン帝国の外交政策：近世ドイツ語翻訳との比較」

松倉 宏真（九州大学大学院）

本セミナーは、中東・イスラーム研究の各分野を専門とする先生方のもとで、報告と質疑にそれぞれ一時間を充て、十分な時間をかけて報告できる貴重な機会である。博士課程という時期は、研究室にこもりきりになったり、あるいは調査地での、のびのびとした生活に慣れたり、独自のペースになりがちな面がある。そうした中で、三日間にわたり集中的に議論し、交流できたことは、大きな刺激となった。

発表者としての経験を振り返ると、今回の報告を通じて、博士論文を形にしていくうえで指針を得ることができた。わたしの研究テーマは「ハプスブルク君主国に対するオスマン帝国の対外政策」である。イスラムに基づく外交理念と現実主義的な政策という二つの側面に注目し、両国間で最初に結ばれた条約（1547 年）から 16 世紀末にかけてハプスブルクとの衝突がエスカレートする過程における和平構築を明らかにしようと試みている。本報告では、その一部を報告した。質疑では、レジュメにおける表現や言葉遣いといった基礎的な点から、分析概念の扱いや史料批判といった技術的な側面にいたるまで、建設的かつ核心を突いたコメントをいただいた。

また、本報告を通じて強く意識したのは、専門外の研究者にも、研究の位置づけと意義をわかりやすく整理して伝えたいと、分析と議論に納得してもらおうことの重要性である。一般的な学会報告では、時間の制約とディシプリンの違いから、本セミナーほど多様なフィードバックを得ることは難しい。多角的かつ専門性の高いコメントを受けることで、自らの力不足があらわになる経験は決して楽なものではない。しかし、それによって現在のテーマへの取り組み方を見直す契機を得られたことは、技術的な指摘とともに、今後に向けての大きな収穫であった。

さらに、本セミナーのもう一つの魅力は、各地から集まった学生同士の交流にもある。北海道から関東、関西、九州と、各地から集まった学生たちが、三日間を共にした意義は大きい。研究報告はもとより、将来のキャリアや人生の悩みについても、合間の時間や懇親の場などで率直に話し合えたことは、学びになっただけでなく励みにもなった。扱う言語や時代、分野によっては没交渉になりがちな中で、イスラーム・中東研究という共通の関心のもと、博士論文に取り組む同世代と親睦を深められたことは、今後の研究生活における大きな支えとなるだろう。

このような博士論文に向けた専門性の高い場を提供して下さった事務局および先生方に感謝を申しあげたい。本セミナーで得た指摘を踏まえ、博士論文をより堅実なものにすべく、いっそう研究に励む所存である。